

ブラック・ブレット～  
白の変革者～

ヒトノミライ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは作者が「あれ？ ガストレアとアラガミってめっちゃ似てね？」という妄想から生まれた作品です。

ブラックブレットとゴッドイーターのクロス作品ですが主人公以外にアラガミが出てくる予定はありません。

# 目次

神の君臨する世界へ

start: ハジマリ	1
Beast. 1 白い獣	4
Beast. 2 一匹は森で	9
Beast. 3 戦闘音を奏でる	19
Beast. 4 エデンの園	29
Beast. 5 生の疾走	37
Beast. 6 運命の歯車	47
Beast. 7 月は哀しみを見つめる	58
Beast. 8 寂しさの中に	58

Beast. 9 故郷へ	74
Beast. 10 旅立ち	96
Beast. 11 赤い瞳	103
Beast. 12 過ち	108



## 神の君臨する世界へ

## start : ハジマリ

(……………つ。こ、こは……………?)

俺が目覚めると、目の前には森が広がっていた。

何を言ってるのかよくわからないと思うが、事実目の前には森が広がっている。

鬱蒼と生い茂る木々が風に煽られガサガサと音を立てる。

夜の暗さも相まって、不気味さが増している。

(な、何がどうなっているんだ? なんで俺はこんな所に……………)

学校からやつと解放され、ダッシュで家に帰りゲームをしていた所までは覚えてい  
る。

だが、どうしてもその先が思い出せない。

(ま、まずはここを出なきゃ)

そう思い、起き上がろうとすると何故か違和感を覚えた。

(……………? なんでこんなに視点が高いんだ?)

普通は目の前の木々の青々と茂る葉などは見えないはずだ。

それなのに、今の俺の視点は木の天辺が見えそうなくらい高い。

(俺はいつの間にも巨人に……って、なんだこれ!?)

自身の手を見てみると、そこに人間の手の面影はほとんど無く、鋭く尖った爪が四本並んでいた。

身体の方に目をやると、真っ白でフサフサの毛が生え、その後ろには三本の真っ白で長い尻尾。

そして腰部から青白い炎のようなモノがユラユラと揺れている。

(これは……明らかに人間じゃない。自分で見た限りだと狐みたいだけど……)

しかし、地球にこんな大きな狐は居ない。

(これだけだと情報が足りないな……。ん？ これは……水の音?)

少し考えに耽っていると、近くから水の流れるような音が聞こえてきた。

(川か? なら、行ってみよう)

川なら水で自身の姿を確認出来るだろう。

そう思い、まだ違和感のある四本の脚で勢いをつけて走り出したのだが、

「キュオツ!?(あ、危なっ!?)」

思っていたよりスピードが出てしまい、慣れていないのも相まって見事にすっ転んでしまった。

それに可愛いらしい悲鳴も漏れてしまった。

それからは急には走らず、ゆっくりと歩き身体を慣らす事に専念した。

すると、段々と身体の違和感が無くなり、人間の時のように無理に意識しなくとも歩けるようになった頃、ようやく川に辿り着いた。

(ふう、やっと違和感が抜けてきた。それじゃあ、俺の顔でも拝みますか)

川の端に近づき、その水面を覗き込む。

固そうな白い甲羅のような皮膚に覆われた顔。

そこに切れ目が入ったように割れたところから漏れる黄色の光のような目。

甲羅のような皮膚が背中に向けて、二本の角のように伸びている。

そして、その付け根から生える黄金の髪の毛のようなモノ。

そう、これは明らかに……、

(ゴツドイーターのキュウビ、じゃないか……！)

## Beast. 1 白い獣

(いや、これはキュウビじゃない。キュウビの皮膚は紫に近い色だった。だけど、この身体には紫色の皮膚がある場所に真っ白の体毛が生えている)

キュウビの特徴は紫に近い色の皮膚に黄色の体毛だ。

ということは、

(マガツキュウビ? いや、それもおかしい。あれは黒い皮膚に白い体毛。もしかして、マガツキュウビの変異種、ということになるか…)

キュウビの特異種であるマガツキュウビ。

それは、ゴッドイーターの中でも指折りの難敵である。

キュウビというのはゴッドイーターの中で、限りなく純粋なオラクル細胞『レトロオラクル細胞』で構成されたアラガミである。

細く、しなやかな外見とは裏腹にとても高い戦闘能力を保有している。

素早く、広範囲の攻撃を得意とする隙の無い強力なアラガミとして存在していた。



そして、マガツキュウビにはキュウビには無かった「殺生石」という技が存在する。黒い球体のようなもので、自身と周囲のアラガミから生成し、これに接近すると体力上限が削り取り、衰弱させるというチート技だ。

しかも、あまりに近くにいると一瞬でLIFEを1にされてしまう。当初はすごく苦戦したのを覚えている。

(だけど良かった。マガツキュウビの変異種なら余程の事が無い限り死にはしないだろうからな)

これがザイゴートになんてなっていたら俺は絶望していただろう。

どう考えても最初のチュートリアルで殺されるイメージしか湧いてこない。

(それに俺がマガツキュウビだということは、ここはゴツドイーターの世界なのか？  
だとしたら絶対に主人公たちには会わないようにしよう。絶対何らかの補正で殺される)

主人公補正ほど恐ろしいものはないと俺は思う。



(うーん、周りは森だらけかあ。少し街でも見てみたいけど行ったら絶対に討伐されるよなあ……)

あれから辺りを散策してみたが目ぼしいモノはあまりなかった。  
あるとしても湖が点々とあったことくらいだった。

(それにこの身体は腹は空かないのか？ たしかにレトロオラクル細胞は他のオラクル細胞を取り込み、自身を変異することはない、ということを知っている。だが、マガツキウビはキュウビの生息域から出て変異したアラガミだ。おそらくは他のアラガミと違い、オラクル細胞を取り込み、レトロオラクル細胞という純粋な状態を保持しながら進化していったと考えられる)

ゲーム内では、マガツキウビはキュウビが元の生息域から外部に出て急速に進化、変異したものと書かれていた。

なら結論としては、腹は減るといふ事だ。

ならば、食場を確保する事が今一番にやることだ。

(でも、アラガミってなに食べるんだ？ 他のアラガミを喰えってことか？

まあ、それは最終手段として今は最初の川で魚でも捉えて食べてみるか)

……

決まったならば、少し離れてしまった川に向かって走り出す。

もう完全にこの身体に慣れたようで危なげなく走ることが出来た。

(しかし別に全力で走っている訳じゃないのに結構なスピードが出てるなあ)

感覚的には時速70キロ前後くらいは出ているのに、この鬱蒼と生い茂った木々にぶつかることはない。

木々が目の前には表れると自然と避ける事が出来ていたし、動体視力も上がっているのか、この速度に目が追いつかない、なんてことも無かった。

(まあ、嬉しいことだ。とつとつこの身体と能力を確認しないとな)

少しすると、あの川のある所に出た。

早速その動体視力で鮭のような魚を捕食。

(なんか、感覚的に何処に魚がいるのか分かったなあ。なんでだろう?)

モシャモシャと骨ごと鮭のような魚を食べてみると、意外と美味しかった。

(味覚が変化したのか? まあ、好都合だからいいけど)

10匹くらい食べると次第に満腹感が襲ってきた。

(へえ、この図体であんな小さな魚10匹でいいのか。低燃費で何よりだな)

満腹になると、今度は眠気が襲ってきた。

別に今すぐやることも無いか、とその場に丸くなるように横になる。

(能力の確認なんかは明日にでもやればいいや。……もう眠いし。)　  
そう結論付けて、俺は睡魔に身を任せていった。

日が登る、数時間前。

彼の身体にある異変が起きていた。

彼がそれに気がつくのは、日が登ってから数時間も後のことだった。

## Beast. 2 一匹は森で

何処からか鳥の鳴き声が響き渡る。

それは、もうすぐ朝が来ることを伝えていた。

地平線から太陽が顔を出し、暗かった森に朝が来たことを知らせる。

太陽が完全に地平線から顔を出すと、川辺の近くで丸くなっていた一匹の真っ白な狐が目を覚ました。

(ん……………、朝か…)

丸るなっていた身体を解しながら起き上がる。

大きな欠伸が漏れる。

地平線から顔を出したばかりの太陽を見て、思わず苦笑が漏れてしまう。

(夜明けとともに起床とか…………)

凝り固まった節々を解すように、ググツと身体を伸ばす。

(んん、よく寝た。…？　なんか首筋に違和感が……。まあ、大した違和感じゃないから放っておくか)

少し身体に小さな違和感を感じたが、まだ少し慣れていないのだろうと結論づけるとすぐ横の川に目を向ける。

(そーいや、昨日はこの川で魚を食べてそのまま寝たんだっけか。でもまあ、それにしてもデカイ川だなあ)

かなりの川幅があるようだから別に食べる魚の数は減らす必要無さそうで良かった。

まあ、この低燃費の身体だからそこまで食べることはないが。

(腹減ったな。また昨日みたいに魚でも食べるか)

川に脚を踏み入れ、近くを泳いでいた魚を素早く捕食する。

(んー、昨日みたいに生で食べるだけだと飽きちゃうかもなあ)

鋭い爪の先に突き刺さった魚を見てそう思ったが、現状では生で食べるしか方法はな  
い。

(焼いて喰いたいのが火のおこし方なんて知らないし……。ん？)

ウンウンと唸っていた俺の目に飛び込んできたのは、腰部から生えていたユラユラと揺れる青白いオラクルの炎。

(……。一応オラクルの炎だからいけるか？)

爪に突き刺さっていた魚をもう片方の手の爪で抜き、器用に爪の間に挟む。

そして、それを俺の後ろでユラユラと揺れているオラクルの炎へと近づけ、炙るようにかざす。

(お、おおお!! 焼けた!)

炙った魚がジュウジュウと良い匂いを立てながら焼けていく。

(……というかこのオラクルの炎は熱があるのか。だ、大丈夫なのか? 俺の綺麗な毛に引火とかしいよな?)

ジュウジュウと音を立てて焼けていく魚を見るとどうしてもそういった不安が出てくる。

(この不安を解消するには手を突っ込むかして試すしかないけど……)

目の前でこんがりといい具合に焼けた魚を見るとそれを試す勇気が無くなっていく。

こんがり焼けた魚を口に放り込みながらウンウンと唸ってしまう。

(あ、生より美味しい)

だが、いずれは試さなくてはいけない道だ。やるしか、ない。

(大丈夫、大丈夫……この身体はマガツキユウビだぞ? 少し火傷を負ったくらいど

うってことないさ!)

勇気を奮い立たせ、勢い良く……では無く、そおつと爪の先つちよをオラクルの炎

に近づける。

そして、爪がオラクルの炎に触れた。

(あ、あれ？ 別になんともない)

爪の先は焦げた感じは無く、伝わってくる筈の熱さも無い。

ならばと思ひ、毛の生えた腕を炎に触れさせるが爪と同様に変化はない。

(なんでだ？ さつき魚は焼けたはずなのに……)

ためしに近くに落ちていた木の枝を爪で挟み、オラクルの炎に当てると、

(あ、燃えた)

木の枝は勢い良く炎上し、炭も残さず灰になり風に吹かれ散っていった。

(つまりこのオラクルの炎は俺の害になるようなモノは燃やさない……というか、俺自身には効かないということか)

まあそうだろう。このオラクルの炎で俺自身がこんがり焼けてしまったら意味がない。

試しに川の中に入れてみてもなにも変化はない。

(なんであれ、不安は解消されたんだ。中断した朝食の続きをするか！)

足取り軽く、川の中に入り魚を探すと少し向こうにさつき食べた魚よりも一回り大きい魚を見つけた。



(結構大きいな。食べ応えがありそうだ！)

テンションが少し上がっていた俺は川底をしつかりと踏み込み、その魚目掛けて飛び掛かる。

(よし！ 捕まえた、って ふ、深っ!?)

それほどの深さは無いと高を括っていたのが仇になり、急に深くなった川に溺れかけてしまう。

(や、ヤバイ!! 息が………ってあ、あれ? 出来るぞ?)

口から水が入っていくのが分かるがそれを呼吸のように酸素を取り入れることが出来るというの普通に考えておかしい。

俺は狐だぞ？

(水中で息ができるって事はエラが出来ているってことか……)

と思つて首筋に触れてみるとあまり大きくはないがエラが出来ていた。

(今朝起きた時に首筋に違和感があったのはこれの所為か……。なんでエラが出来たのか、と考えると思い当たるのは一つだけか)

水中で呼吸が出来るようにエラがある。そんな種類の生物はそう多くはいない。

(昨日食べた魚か? あれを食べたことで俺の身体が進化し、エラ等の水中で呼吸す

るための呼吸器官を生成したって事か?)

自分の身体には無い器官を食べた物から情報を得て、急速に進化していく。

そして、その進化の速度が物凄く早い。

(流石はマガツキユウビつてところか。それに体毛も何故か硬く甲羅みたいに変化してるし)

川に入る前まではキューティクルな真っ白い体毛だった筈なのに、今は甲羅のように硬く変化している。

試しに川から上がってみると、みるみるうちに甲羅のような硬さが取れ、キューティクルな体毛に変化した。

(これを考えるに、水中での活動を考えるとこの体毛は邪魔になるから変化したってことか)

ただ闇雲に進化するのではなく、環境にキチンと適用するように進化している。

よく見ると、爪と爪の間に青白い水掻きのようなモノが出来ている。

おそらく尻尾のオラクルのようなモノで創られているそれは、川から上がると霧散して消えていった。

しかしである、

(……)までのチートのような成長進化であつても主人公たちに勝てるビジョンが思い浮かばないのは何故だ……)

あらためて、絶対に主人公たちに遭遇しないようにと心に決めた。

(にしても水中で呼吸が出来るってのは楽だなあ)

川の中をスイスイと泳ぎ回り、途中にいた魚を爪で捕まえていて単純にそう思った。  
(それにそんなに視界がいいわけじゃないのになんか心配っぽいのが分かるんだよなあ。おっと、見つけ！)

魚の心配？ のようなモノを感じ取り、爪で一突きにする。

(そーいやどつかの雑学で聞いたことがあったな)

少し前に高校の科学の担当の先生が話していたのを思い出した。

『みんなは“気配”というものを感じたことはあるかな？』

たとえば、それが見えなく足音や息遣いが聞こえなくても気配を感じるということがある、みたいな事や後ろに気配を感じ、振り向いてみたら本当に人が居た！なんてことを経験した人もいるだろう？ 意外と気のせいで済ませることが出来ない“気配”

“という曖昧なもの。”

じゃあなぜ誰も居ないのに人の気配を感じるのか。

——その答えは電気だ。

生き物は活動すると微弱な電気が発生する。その電気を他の誰かが感じると“気配”となる。

その気配の持ち主が去っても、気配だけが残されてそれを感じることが出来るというわけだ。

そして、人間に限らず生物は全て微弱な電気を発生させている。歩く場合には足の裏の接地面積が変化したり、電荷のやりとりが起こったりすることで電界の状態が変わり、数メートル離れた場所にいる別の人間の生体電位に影響を与えることで“気配”として察知される。

つまり、“気配”の正体は身体の周りで作られている電気だったということだ』

(つまり、俺は他の生物の発する電気を敏感に感じ取ることが出来るって事か)

なんか心配がするな、という感じではなく、完全にあそこに何かいる！　というのが分かることからして相当感知能力が高いのだろう。　　というの

(流石マガツさん。基本的なスペックもチート級だな)

6匹もの魚を捕獲した俺は悠々と川辺向かって泳いでいた。

(というか、マガツさんに転生した俺って前の時よりも基本的に勝ち組じゃね？　主人公たちにさえ会わなければ大抵のアラガミには負けないし。ゲームが出来ないのがちよつと残念だけど、しょうがない)

そして、川辺に上がった俺は早速捕獲してきた魚たちを炙って食べるのだった。



ーーーしかし、川からは大きな影がその白い狐を睨んでいた。

## Beast. 3 戦闘音を奏でる

地平線から太陽を顔を出した頃、俺はゆっくりと目を覚ました。相変わらずの夜明けとともに起床に苦笑が漏れる。

凝り固まった身体を解すように伸び、朝食でも摂るかと思えば再び川に潜る。が、今日の川は少しおかしかった。

（なんだ？ 昨日はたくさんいた魚たちが全くいない）

昨日最後に食べたのが日が沈む頃。

その時は結構な量の魚がこの川にはいた。

だが、今はどうだろうか。まるで狐に化かされたように一匹も気配を感じない。

（アラガミに、喰われたのか？ ……いや、待て。まずアラガミが居るならこの森な

んてものは真つ先に喰いつくされる筈だろ）

川の異変で初めて気づいた身近な疑問。この森について。

アラガミが居るならこんな広大な森は絶対に存在しない筈だ。

なにせアラガミ——オラクル細胞はなんでも喰べる。

原作でソーマが話していたが、オラクル細胞はそれ単体で考え、捕食が可能な単細胞

生物だと言っていた。

それが数万、数十万と寄り集まり結合した存在が主にアラガミと言われている。

そして、アラガミの一番恐ろしいところは食べたモノの性質を取り込み、学習する点だ。

しかも、アラガミはなんだつて喰べる。有機物だろうが無機物だろうが喰う。生物には毒でしかない核廃棄物だつて喰べる。

だからどう見ても機械にしか見えないアラガミも居た。おそらく戦車や兵器を喰ったアラガミだ。

だからこそおかしい。

原作じゃあほとんどの植物はアラガミに喰われ、絶滅した。

なのにこの森は悠々とその根の伸ばし、天を貫くとばかりに日々その丈を伸ばし続けている。

(もしかして、ここにアラガミは居ないのか？　だとしたらこのは何処なんだ？)

植物を見る限り、おそらく日本じゃない筈だ)

熱帯雨林にしか生えないようなシダ植物や灌木が所々に見えていた。

中には、見たこともないほど捻れた樹が幹を伸ばしながら、周囲の樹に絡みついているものもある。



これを見る限り、日本ではないことは確かだった。  
なら、ここは何処なのか。

ゴツドイーターの世界でこんなにも植物が生い茂っている場所は無いとされていた  
筈だ。

(もしかして、ここは——)

その瞬間、背後から大きな影が襲った。



その黒い影——水生ガストレアは虎視眈々とずっとこの瞬間を狙っていた。

昨日、周囲に喰べるものが少なくなったそのガストレアは空腹を満たすために川を下っていた。

少しの間、川を下っていると大量の魚がいるのを見つけた。

すぐさま喰べてしまおうと思ったが、それは出来なかった。その周囲を自分より強いガストレアが泳いでいたからだ。そのガストレア本能的に悟っていた。あのガストレアに真正面から挑んでも勝ち目は無いと。

この知能がガストレアという生物の恐ろしいところである。

だから、あのガストレアが川から上がりがり少し離れたところまでぐるを巻いて寝息を立てたのを見計らい、川の周囲にいた魚たちを喰べ尽くした。

久しぶりに大量の餌を見つけて舞い上がっていたのか、魚たちを喰べ尽くした頃にはすでに夜明けだった。

あのガストレアが起きる前にここから逃げようと思った時にはすでに遅かった。あのガストレアはゆっくりと起き上がってしまったのだ。

このままでは自分は喰われてしまう。川に息を殺しながら潜んでいたそのガストレアは思ったが、あのガストレアはこの川に魚たちが居ないことに気づいたようだったが何故か襲ってこなかった。

少しの間川に目を向けていたが、その視線を森の方や向けたのだ。

これはチャンスだとそのガストレアは考えた。幸い、川の近くで森に目を向けているので川からの奇襲が行えそうだった。

そして、身体全体が森の方に向いた瞬間、そのガストレアは川から飛び掛かった。

それに気づいた様子はない。

自身のヒレとは別に生えた虎のような鋭い爪があと数センチで当たるところでそのガストレアは勝利を確信した。

だが、その予想は外れた。

消えたのだ。

それは比喩表現などではなく、触れる一瞬のうちにあのガストレアはまるで最初からそこに居なかったかのように消えてしまった。

飛び掛かった反動を殺し切れず、無様にも地面を滑るそのガストレアは瞬時に起き上がり、周囲を警戒した。だが、生き物の気配はまるでしない。

少しの間、警戒していたが何も起こらず、風に揺れる木々の音だけが周囲に響き渡っていた。

そして、なにも居ないと判断したガストレアは警戒を解き、歩き出そうとしたその時、身体に衝撃が走り、木々をなぎ倒しながら吹き飛んだ。

そのガストレアはいきなりの奇襲とダメージの大きさに驚愕していた。

あの状態で何処から奇襲をしたのか検討もつかなかった。

殴られたと思われる、身体の腹部は内側にめり込んでおり、その衝撃を殺し切れずに一部の内臓をズタズタに破壊していた。

「ギ、ギイヤヤヤヤヤヤアアアアアアアアアアアッ!!!」

襲撃者であり、今は姿の見えないあのガストレアに向けて怒りの咆哮をあげる。

数十秒すると内臓も回復し、身体も治った。

そして、あのガストレアを食い尽くすために吹き飛んだ道をガムシヤラに走った。

そして見えた。あのガストレアが。

真っ白の体毛に、大きな白い尻尾と腰部から生える青白い炎のようなもの。

そのガストレアは怒りで我を忘れ、勢いよくその白いガストレアに飛び掛かった。



(なんだこいつ。アラガミか？　にしては気持ち悪い外見してるな)

奇襲した瞬間に一瞬だけ見えた不気味な姿に、俺は影の中に潜みながらそいつに触れた右手――右前脚をさすっていた。

(出来るってのはわかってたけど、やったこと無かったから不安だったが、ぶつつけ本番で出来たな)

あの時熟考していても、俺は気づいていた。俺をアラガミが狙っていることに。

いや、別にあの時に気付いたわけじゃなく、川の気配を探った時から気づいていたが、敢えて泳がせておいた。どうせ襲ってくるのは分かっていたし、こうして試したい事もあったからだ。

(原作でマガツキュウビが影のようなものを展開して泳いでるみたいに攻撃していたのを見て、出来るか？　と思っただが出来て良かった)

あの瞬間俺は攻撃が当たる寸前、一瞬で影を展開、そしてその影の中に入る事で攻撃



(大体の回避行動は行ったから次は特殊攻撃か)

何度か繰り返し、段々と反射的に出来るようになってきていた。

今度は相手の右脚での大振りな攻撃をギリギリまで引きつけ、当たる寸前で影に潜り込む。

敵を見失い、一瞬硬直したのを見て背後の影から身を現す。

そして、影を鋭利な形に変形させムチのように斬りつける。

「ギヤイイイイツツ?!?!」

いきなりの背後からの攻撃にパニックになったようでガムシヤラに攻撃し出した。

(よし、じゃあ最後にあれをやるか)

辺りをめちやくちやに攻撃しているアラガミを影を使い、下から上空に向かって吹き

飛ばす。

「ギヤツツ?!」

いきなり上空へと放り出せれ、混乱しているアラガミに向かって三本の尾から無数の赤いレーザーを放射する。

半分は普通に相手に当たるが、残りはジグザグに曲がりながらアラガミを貫いた。

(これでフィニッシュ!!)

上空でレーザーに蜂の巣にされたアラガミはそのまま重量に従い、落下してくる。

それを爪にオラクルの炎で武装するように固定する。

まるで爪が長くなったように見える。

ガリガリガリッ！ と地面を切り裂きながら相手が地面に落ちるところでタイミ

ングよく振るう。

するとアラガミは綺麗に三枚におろされた。ついでに後方の木々が衝撃波でも出たのか、爪の延長線上に沿って切り裂かれていた。

（よし、圧勝だったな！）

俺は満足そうに頷いた。

（あ、でもメシどうしよ）

ボロボロになった周囲を見渡し、俺は呆然と心の中でそう呟いた。



## Beast. 4 エデンの園

凄い速さの中で、周りに映る木々が次々と変わっていく。

前方に現れる木をスイスイと躲し、黒い海を泳いでいく。

途中、毒々しい程に色鮮やかな花々が咲き乱れる一帯に出ると、肉が腐ったような腐臭が漂ってきた。その一部であり、花が集中している岩のような物体がもぞもぞと動いたのを見て、鳥肌が立った。

暫くの間、次々と映り変わる風景を眺めながら泳いでいると、ふと視界に一瞬黄色いモノが映り込んだ。

まさかと思いつながら戻ってみる。

その一帯はまさに果物の森と言うべきものだった。

先ほど見た黄色いバナナを始めとして、スイカだと思わしきものや苺、葡萄、林檎、他にも色々な果物が其処ら中に実らせている。

(絶対に此処を縄張りにするッ！)

俺の心は一瞬で決まった。



あの気色悪い姿をしたアラガミを綺麗に三枚におろし、料理人の才能を自覚してしまつた俺は、メシを求めて森を影の中を泳ぎながら彷徨つていた。

途中までは走つていたが、一回試しに影の中に入り泳いで見た所、此方の方が疲れな  
いことが分かつてからはずっと影の中だ。

あのアラガミの所為で川の魚たちが全滅してしまつたから、俺はこうしてメシを求めて森を彷徨つているのだ。まだ、上流の方に魚がいるかと探つてみたが見事に喰い尽くされていた。傍迷惑な奴だ。

それから数時間の間、ずっと森を彷徨い続けていたのが功を成したのか、果物の沢山実っている楽園のような場所に着いた。

なんでこんな所にバナナが、とかはこの際どうでもいい。喰べてみたら美味しかったから。

(よし、ここら一带を果物の楽園と名付けよう)

縄張りに名前を付け、愛着が湧いた所でもう一つやるべきことがあった。

(ここら一带のアラガミは駆除しよう)

アラガミが周囲にいれば、この楽園はすぐさま消えてしまうだろう。

そんな事は許さない。俺が見つけたんだから。だからこそこの駆除。

(まずはこの近辺の駆除からだ)

気配を探り、もう暗くなり始めた森の中を音も立てずに走り出す。

走り出すと言っても影の中を泳いでいるだけだが。

(まずは一匹)

巨大な鱈のようなアラガミに影を十数もの鋭利な棘に変化させ、一気に串刺しにする。

鱈もどきは断末魔すら上げずにアツサリと死に絶える。

そうやって近辺のアラガミを一匹ずつ駆除していったが、中々に数が減らない。

(一匹ずつつてのが効率が悪過ぎるんだ)

一気に駆除出来たら楽なんだなあ、と思っっていると一つの閃きが思い浮かんだ。

(大きな音でも立てれば集まってくるんじゃないか?)

アラガミも生き物だ。そして、なんでも喰べる性質もある。音を立てれば喰い物だと思っ集まってくると予想した。

(なら、この俺が盛大に咆哮をかましてやろう!)

スウウウツと大きく息を吸い込む。

そして、

「ーーGYEEEEEEeeeYAAAAAaaaaaa  
 a a a ツツツ  
 !!!!!」

森全体に響き渡る咆哮に、森が起き始める。山彦のように響き渡っていた咆哮が止むと、周囲からドシンドシンドシントと地響きが聞こえてきた。

(あ、あれ? やり過ぎた?)

後悔先に立たず。

ふと脳裏をよぎったのは救いもないような諺だった。

既に見える範囲で百数十はいるアラガミの波が見え始めた。

(だ、だが、やってしまったことはもうしようがない。なるべく楽園を傷付けずに駆除していこう！)

そうして俺の『エ果物の楽園の創造計画』が始動したのであった。



(クソツ、すげー時間掛かったー！)

あれから駆除を始めておよそ6時間。

最後の一匹と思われる8メートルはありそうな恐竜のようなアラガミを17分割し  
 終え、ようやくアラガミの波が止んだ。

斬っても斬っても湧いて出てくるアラガミの波に、思わず怒りの殺生石を使ってしま  
 ったが問題ない。

その所為で百体近くが一気に干からび、後から続いて来ていたアラガミの波に飲まれ  
 塵になっていったが全く問題ない。

集まった生命力っぽい何かが俺に吸収されて、力が漲って腰部から生えているオラク  
 ルの炎がブースターのように勢いよく放出されているが、それすらも問題はない。

問題があるとすれば、その生命力っぽいモノの所為で腹が満たされたことくらいだ。

(体力的には問題ないが、精神的にすごく疲れたな……)

体力がまだまだ有り余るほどあっても、今の俺は精神的にお疲れだ。

もう深夜だし寝るか、と腰部のオラクルの炎を沈め、とぐろを巻こうとしたが何かの  
 気配を感じ取った。

(さっきの残党か? いや、でも一体だけだし、気配があまりにも弱すぎる。これは、  
 アラガミじゃ……ない?)

先ほど駆除した一番弱かったアラガミの足元にすら及ぶ可能性すらあるかどうかの  
 レベルだ。

だが、油断は禁物だ。

既に疲れや眠気は吹き飛んでいた。  
いつでも戦闘態勢に入れるように、十分に警戒する。

そして、ついにガサガサツと目の前の草木が激しく揺れ、何かが飛び出てくる。  
(な、なんだ？　し、少女……か？)

目の前の草むらから飛び出て来たのは紛れもなく人間だった。  
いや、少しおかしな点はある。

(み、耳だ……。耳が生えてる……)

セミロングの茶髪の前髪から見える三角耳は明らかに動物の耳のようだった。  
その少女は全身に浅くではあるが無数の切り傷を負っていた。

フラフラと足取りがおぼつかず、今にも倒れそうだった。  
すると少女は俺に気づいたようで驚いて目を丸くした。

そして少女は、

「……………かみ、さま……………」

そう言い残し、バタリとついに倒れた。

(放置しておくにもいかないか……)  
倒れた少女を、俺は優しく影で抱き上げ、背中に乗せて果物<sup>エ</sup>の楽園<sup>デン</sup>へと歩き出していった。



## Beast. 5 生の疾走

薄暗い真夜中の樹海。およそ全ての生物が眠り、夜行性の動物が暗闇から光る眼を覗かせる中、一つの影が走っていく。

――傷だらけの少女、ことねあかり琴音朱莉は己の未来と自由を求めて全力で疾走していた。

時々周りから聞こえるガストレアの雄叫びに震えながらも、その足は前へと駆けていた。

もう何時間走ったか分からない。

前に見た風景は日が高く登っていたのに対し、辺りは暗黒が広がっているからして、すでに4時間以上は走っている。

『呪われた子供たち』の中でも稀有なその頭部から生えている三角耳を使い、唯一と言える自分の長所の聴覚の強化をして、ガストレアと遭遇しないように警戒を張り巡らせながら走っていた。

これまでになく危険な橋を渡ったかは覚えていない。

ただ逃げる為に走って、走って、走っていた。

いつからだろう、と朱莉は何時間走り続けた所為で酸欠気味になった頭で考えた。いつからこの悪夢は始まったのだろうと考えると、あの時しかなかった。

元々、朱莉は多くの『呪われた子供たち』の例に漏れず、外周区で他の子供たちと一緒に暮らしていた。

生活はとてもではないが豊かだとは言えず、毎日の食事にも困るような生活だったが、朱莉は幸せだった。

だが、その生活は容易く崩れ去った。

ある日突然一人の男が外周区にやってきたのだ。

その時一緒に居た他の子供たちは、男を見るなり散り散りになりながら逃げてしまった。

だが、朱莉は外から来た人を見たのは初めてだったのだ。

「好奇心は猫をも殺す」と言うように、朱莉は好奇心という誘惑に負けてしまった。だから、話し掛けてしまったのだ。

「なにか御用ですか？」

そう朱莉が男の後ろから話しかけると、男は少し驚いたように振り返る。

男の顔は三本の傷が入っていて、元からの強面の顔をさらに上へと押し上げていた。優しそうなイメージを浮かべていた朱莉は驚きや困惑、恐怖などに駆られて動けないでいた。

男は朱莉を頭からつま先までじっと見つめると、ニヤリと笑ってこう言った。

「お前、俺のイニシエーターになれ」

勿論、拒否は認められずに手を引かれ、外に停めてあった男の車に乱暴に乗せられた。

まだ、状況を理解出来ずにいる朱莉に、後部座席に乗り込んできた男は懐から拳銃を取り出し、朱莉の眉間に当てた。

「静かにしろよ。もし暴れたりしたら、ブチ殺す」

朱莉は恐怖で真っ青になりながらも、ゆっくりと頷いた。

それからの事は、ほとんど覚えていない。

外周区では見れないような立派な建物に入って、男が何かを登録していたのを辛うじて覚えている。

それからはずっと車の移動で、朱莉は恐怖でブルブル震えていた。後悔しかなかった。

あの時、話しかけるなんて事、しなければよかった。

その言葉が何度も脳裏に反響するが、事態は何も変わらない。

少しすると、周りに他の車が並んでいた。その窓は空いており、何かに警戒しているようだった。

チラリと後ろを見ると、見慣れたモノが目に入り、驚愕するとともに絶望した。

黒光りする、その巨大な建造物。

あんなモノを人が本当に作ったのかと最初は疑った。

————それは、モノリスだった。

先ほど見たときは前方にあった筈のモノリスが後方に見えている。

その意味は、絶望という感情以外は芽生えてこないものだった。

つまり、ここはモノリスの外。

エリア外、未踏査領域。

仮初めの楽園の外であり、ガストレアが蔓延る地獄のような世界。

泣き叫びたかった。

しかし、それを許すまいと運転席に座る男は威圧していた。

泣き叫ぶなんてことをすれば、自分はすぐに殺されるだろう。

朱莉は静かに涙を流した。

モノリスの外に出てから少し時間が経ったところで、車が停止した。

後部座席で震えていた朱莉を、男は乱暴に引きずり出した。

車の外に出ると、目の前には鉱山が広がっていた。

その入り口には、ヤクザのような強面の男はたちが黒光りする刀を持ちながら周囲を警戒していた。

それはガストレアを警戒することよりも、その鉱山で働いている者たちを見張る意味合いの方が強かった。

そこで、男は見張りの男らに朱莉を連れていき、突き出した。こいつは赤目だから、遠慮なく使えと。

そこからは、地獄の日々だった。

なんの希望もない鉱山労働を寝る間も惜しんでさせられた。

逃げようとも考えた。

しかし、朱莉は他の子供たちとは違い、身体能力は力を解放しても大人と同じか少し上くらいだった。

一体一なら、まだ希望はある。

だが、外にいる男たちはチラツと見えただけで十は居た。

逃亡は無理だった。そんな事をすれば殺されるのは確実だった。

労働の合間に、男たちは自身の鬱憤を晴らす為に朱莉を殴っていた。

バラニウムでは無く、鉛玉も撃ち込まれた事もあった。死なないように、急所は外し、

朱莉が悲鳴をあげるのを楽しそうに見ていた。

そんな日々がどのくらい続いたかなんてものは分からない。

感覚が麻痺してたのもあるが、自分の行く場所には時を示す物はなかったのが一番の理由だった。

だが、そんな地獄の日々は唐突に終わりを告げた。

いつものように、男たちに叩き起こされ、仕事場に向かおうと重い足を引きずりながら歩いていると、突如森の方から空間を揺らすような咆哮が響き渡ったのだ。

男たちを含めた全員が狼狽し、恐怖に駆られた。あれは明らかにガストレアの雄叫びだ。

その証拠に、其処ら中から地響きが聞こえてくる。

チャンスはここしか無い。

朱莉はそう思った。この地獄を終わらせる唯一の機会は、これを逃すと絶対にこない。

男たちの絶叫が響き、混乱に陥っていた。その混乱に紛れて、朱莉は走り出した。

逃亡はあっさり成功した。成功はしたが、それからが問題だった。

追っ手は、ない。だが、辺りには興奮したガストレアが獲物を見つけようと身を潜めている。

朱莉は力を解放し、絶対にガストレアに遭遇しないように走っていた。

だが、足音は立てず、全力で。

心臓はバクツバクツと張り裂けそうなほどに高鳴っている。

緊張を切らせたその時、その瞬間が死を意味すると、朱莉は本能的に分かっていた。

足取りは悪くなり、走ることもままならなくなってきた時、ある変化に気づいた。  
いないのだ。ガストレアが。

走ることに精一杯で辺りの異変に気づくのが遅れたのだ。一瞬でも気を抜けば、死ぬ  
と思つたくらいにいた筈のガストレアが、今は全くいない。

それを最後に、力が解放出来なくなつた。疲労や栄養不足もあり、力を解放し続ける  
事が出来なくなつた。

だが、最後に確認出来て良かったと朱莉は思った。



もし、それを確認出来ずにいたら、自分は恐怖に押し潰されていただろう。空へと視線を向けると、暗闇の中に星々が爛々と輝いていた。

そして、見た。天を貫くと言わんばかりにそびえ立つ樹を。

朱莉の足は、自然とあの樹を目指していた。

朱莉自身、地面から飛び出た木の根に足を取られ、転んで初めて気づいたのだ。

だが、自覚しても進むのをやめなかった。ただただ、あの樹に向かって歩く。

そして、一つの草むらを抜けた時、それは居た。

体長8メートルはある。

その背には満月があり、月光を浴びていて、まるで後光のようだった。

体毛は何物にも染まらないように真白く、腰部から伸びている幽鬼のような青白い炎がユラユラと揺れている。その後ろには、大きな三本の尻尾が波風に揺られるに佇んでいる。

その月光が、神々しくその生物を照らしていた。

そう、まるで――

「……………かみ、さま……………？」

神の如し。

## Beast. 6 運命の歯車

俺は倒れた少女を、エデンの中心にある大樹に連れて行った。

この樹を見つけたのは、アラガミを駆除していた時だ。途轍もなく大きな樹で、寝床にピッタリだと思って死守した。

この樹から半径約百メートルくらいの果物の樹たちは無事だ。他は全て戦闘で木の残骸へと変わってしまったが。

殺生石が良かったな。あれが無ければ、こんなに果物の樹は確保出来なかった。

この大樹は本当に大きい。

直径は三十メートルくらいはある。

洒落た言い方をすると、エデンの園の中心にある世界樹。

だから、こいつの名前は「世界樹」にした。中心を俺が入れるくらいに削り取って、木の残骸から葉っぱなどをかき集めて布団代わりにしている。

ここに少女を寝かせ、と思ったが傷が少し多すぎる。擦り傷が無数にあるようだ。このまま寝かせれば傷にさわる。

どうしようか、と思っていたがすぐにピンときた。

(さっきの戦闘で吸収した、この有り余るほどの生命力を分け与えられないか?)

吸う事が出来れば、吐くことも出来る筈。

吸う時の感覚の正反対のことをすれば……………。

(そして、対象をこの少女に……………)

すると、俺の身体から淡い青い光が溢れた。それを少女に吐き出すようにして、少女に与える。

淡い光は少女を包むと、ゆつくりとその身体を癒していった。

(よし、成功だな)

それまで苦痛に歪んでいた少女の表情が、今では安からになっていた。

このまま葉の布団に寝かせようと思ったが、俺の尻尾を布団代わりにする事にした。

こっちの方が、葉っぱより寝心地がイイだろうと思ったからだ。

一本を布団代わりにして、もう一本を掛け布団のように少女の身体に被せる。

(俺も疲れたし、このまま寝るか……………)

そして、俺はそのまま樹の中でとぐろを巻いて眠りについたのだった。



「ん…………、(ん)は…………」

琴音朱莉はゆっくりと目を覚ました。

まだ、身体に気だるい眠気が残っている。このふわふわした布団の魔力に勝てず、そのまま寝てしまいたい欲望が芽生えたが、それを無理矢理押し込み、意識を覚醒させる。まだ、少し眠気が残る意識で辺りに目をやるが、暗くてぼんやりとしか見えない。

「えっ、布団…………？」

自分は、動物の毛皮のような物が布団代わりに敷かれ、同じ毛皮と思われる物を被っていた。

「な、なんで…………。——っ！ き、傷が…………！」

あの夜に負った筈の傷が無くなっていたことに気づいた。

ガストレアを避ける為に、荒れた道を通っていた時に負った傷が無くなっていたのだ。

あれだけの傷がすぐに治るのはおかしい。

「……………？ この毛皮、なんだか温かいような……………」

じんわりと温かさが毛皮から伝わってきていた。

それにここは何処なのか、確認しようと毛皮をどかした。

そして、ここが密閉された空間だということに朱莉は気づいた。

目の前に穴が空いており、そこから月の光が差し込んでいた。

そして、気づいた。

「ヒィッ！」

喉から、思わず悲鳴が漏れてしまう。それから慌てて口を手で塞ぐ。

居たのだ。あの生物が。

自分が最後に見た、幻想。

背に満月の光を背負い、朱莉の目にまるで神の如く映った、あれが。

それが、すぐそばでとぐろを巻いて、寝息を立てているのだ。

蛇に睨まれたカエルのように、朱莉の身体は硬直した。

朱莉の悲鳴で目を覚ましてしまったのか、それがゆっくりと頭を起こした。

月の光がその生物を照らし、朱莉はやつとその正体に気づいた。

(狐の、ガストレア……)

自身のガストレアウィルスのモデルである狐だった。

その大きさは絵本で見たものとはまるで違っていたが、その姿形は多少違えど狐だった。

そして、その尻尾の上で自分は寝ていたのだと。

狐のガストレアは朱莉が目を覚ましているのを確認すると、尻尾を動かさないようにゆっくりと身体を起こし、此方にその鋭い爪が生えた前脚を伸ばした。

殺される！ そう思って、目を涙を溜め、身を固くした。

だが、その爪は朱莉の身体を引き裂くことなく、優しくその尻尾の上に押し倒し、寝かせた。

「……………えつ、なんで……………」

理解出来なかった。

まるで、まだ寝てろと言うように優しく寝かせたのだ。

朱莉はまだ状況を把握していないうちに、狐のガストレアは傍に置いてあった赤い色のした果物を、爪を器用に使い、少女の頭の上に二個ほど置いた。

「た、食べろつてこと………?」

零れてしまった言葉を聞いたのか、狐のガストレアは此方を向き、キュオと小さく鳴いた。

朱莉はそれが、そうだと言っているのが分かった。

その鳴き声を理解した、というわけでなく、本能的に分かったと言った方が正解に近い。

「あ、ありがとう」

まだ理解は出来てはいないが、ちゃんとお礼は言った。

狐のガストレアはまた小さく、キュオと鳴いた。

「……気にするな、と言っていた。」

朱莉は、このガストレアの言っていることが分かったのだ。

朱莉の言ったことに反応し、返したというのは此方の言葉を理解しているという



ことだった。

会話が……できる。

それは、普通のガストレアではあり得ないと言われていたことだった。

だが、実際に目の前にいるガストレアは此方の言葉を理解しているし、自分自身も理解できる。

同じ狐という種族が原因なのかは定かではないが。

だから、聞いてみた。

「あなたが、助けてくれたの……？」

ずっと聞きたかった言葉だった。

そう言うと、狐のガストレアはまた小さく、キュオと鳴いた。

——そうだ、と言っていた。

「ありがとう。助けてくれて」

不思議と、ついさつきまであつた恐怖を消え失せていた。

だから、自然にそう言えた。

狐のガストレアは驚いた様子だった。別にその表情はほとんど変化していないが、朱莉には分かったようだった。

キュオツと先ほどまでとは違い、強い鳴き声をあげた。

朱莉は、理解していた。

だから、こう答えた。

「……分かるよ。あなたの言葉」



俺は、助けた少女の悲鳴を聞いて目を覚ました。

その少女は身体を起こして此方を見て固まっていたが。

まあ、普通アラガミが近くに居たら流石にビックリするか。

少女の身体をゆつくりと押し倒して、再び尻尾の上に寝かせる。

少女はまだ混乱しているようで目を白黒させていた。

傍に置いておいた林檎もどきを二つ取り、少女の頭の上に置いた。

後で食べるよ、という意味合いをもって置いた。

「た、食べるってこと………?」

少女が呆然と呟いた。

少し違うが、まあいいかと思ひ、そうだという意味を込めてキユオと小さく鳴いた。

「あ、ありがとう」

再び横になろうとすると、少女の声が聞こえた。

律儀だな、と思った。

だが、嫌いじゃなかった。

俺は気にするな、という意味を込めてまた小さくキユオと鳴いた。

少女は目を丸くしていた。

何がそこまで彼女を驚かせているのか分からなかった。

おそらく、アラガミに助けてもらったということに驚いているんだろう。

「あなたが、助けてくれたの……？」

その問いに伝わらないだろうがそうだと小さく鳴いた。

すると彼女は少しだけ微笑み、

「ありがとう。助けてくれて」

そう言ったのだ。

俺は驚いた。

今の言葉はたまたまか？

それとも理解してか？

それを確かめるために、俺はこう言ったのだ。

「キュオツ（分かるのかツ？）」

本来伝わる筈のないその問いに、

「……分かるよ。あなたの言葉」

彼女はそう、答えたのだった。

……これが、俺と少女……琴音朱莉との出会いだった。

## Beast. 7 月は哀しみを見つめる

スウスウと少女の寝息が、この静寂の暗闇に静かに響く。

俺は尻尾を腹に抱えるように置き、そこで少女が気持ちよさそうに寝ている。

時々寝返りを打ちずれた身体を尻尾と前脚で直してやる。

——あの時、色々聞きたい事はあった。

だが、まだ少女は病み上がりだ。

それを配慮して、まだ寝てろと無理矢理寝かせたのだ。やはり疲労が溜まっていたのか、暖かくなるように尻尾に寝かせるだけでなく、俺が腹で抱きかかえるようにすると、その目蓋はすぐに落ちた。

おそらく、気づかないうちに身体に疲労を溜めていたのだろう。

それに、不安だつてあつた筈だ。

この暗い森の中を一人で彷徨つていたんだ。アラガミと遭遇する緊張もそれを助長

しているのだろう。

だから、今日はゆっくり寝かせてやることにして。体温を感じ取れるように尻尾で寝かせて。

最初この子に出会った時——いや、この子の存在を感じ取った時からずっと不安だったことがあった。

それはこの子がゴッドイーターかどうかということ。もし、ゴッドイーターならば俺は殺される可能性がある。俺は油断や慢心はしない。発見され有害だと判断されれば、人間は——ゴッドイーターは俺を殺す為に死に物狂いで向かってくれだろう。

死を覚悟したもののほど恐ろしいものはない。そこが人間の怖いところでもある。人はいつでも、不可能と言われたものを可能にしてきた。

あの世界で、神とまで恐れられたモノたちに立ち向かうために、神に対抗する為の神機や、神を喰らうものたちを作り出した。

そう、人は自分たちの種の危機だとわかると神にすら抗うのだ。  
俺だって無敵だという訳じゃない。

他のアラガミの例に漏れず、コアだつてあるし、それを破壊されれば死ぬだけだ。  
それを警戒しないなど、元人間の俺には出来なかつた。

だから、姿を現した時は最大の警戒を維持していた。もしそうなら、いつでも殺せるように。

だが、彼女にはゴッドイーターには絶対あるべきものが存在しなかった。

正式名称「P53アームドインプラント」。通称腕輪と呼ばれるゴッドイーターには着用品が義務付けられているモノ。

腕輪は一度装着すると肉体と結合し、生涯外すことは出来ない。

ゴッドイーターがアラガミ化を防ぐ為にも絶対に着けていなくてはならないモノだ。それを彼女は着けていないのだ。

神機すら持っていない。

それを確認している時、彼女は倒れてしまったわけだが。

運ぶ際にも色々と確認したが、シオのように人型というわけでもなく、神機を隠し持っているわけでもなかった。

ただ、頭部に生えた動物のものだと思われる三角耳は疑問だったが。

そしてその後、彼女を連れて世界樹に入り、目が覚めるまで待つていたというわけだ。

彼女の衣服はお世辞にも綺麗とは言い難いものだった。身体中には無数の小さな傷があつたし、泥や草などに塗れていた。



傷は治ったが身体の汚れまでは取れていない。

ーこりや、彼女が起きたらまた川に行くしかないか。

再び寝返りを打ち、尻尾から転げ落ちそうになった彼女を優しく直してやる。

そして

月光が差し込む世界樹の穴を見て、そう思ったのだった。



「……………うん……」

再び彼女を寝せてから数時間が経った頃、彼女は目を覚ました。

もう辺りは暗さはなくなり、朝を迎えようとしていた。

彼女が目を覚ましたのを確認すると、俺は被せていた尻尾を退けた。

彼女は少し肌寒い空気に触れ、ぶるりと震えた。

まだ完全には目が覚めてはいないのか、その手は温かい俺の尻尾を探している。

もう一度被せても良かったが、俺も彼女に聞きたいことがある。

少し酷だとは思いつつもそのまま放置した。

「……………あ、おはよう……………」

少し経つと彼女の脳は正常に動き出したようだった。

欠伸をしながら大きく身体を伸ばすと、俺の存在に気づいたようで朝の挨拶をしてきた。

一応、挨拶のつもりで小さく喉を鳴らした。

すると、彼女はこちらを見て微笑んだ。

「……………やっぱり分かる。不思議だな。ガス・トレアと言葉が通じるなんて」

「……………ちよつと待て。彼女は今、なんて言った？」

今言った彼女の言動について問いたただそうと口を開きかけた時、彼女のお腹が空腹を訴えた。

「……………お腹空いた」

少しだけ、頬を染めながら恥ずかしそうに俺の方を見た。

(……………はあ、しょうがない)

この中に溜めておいた林檎もどきは昨日の最後だった。

仕方なしに、俺は思い腰をあげた。

「キュオ（ここから出るなよ）」

「…分かった」

彼女は不安そうに俺を見つめていた。だが、すぐに頷いた。

「キュウ（すぐ戻る）」

「ほ、ほんと?」

「キュツ（本当だ）」

そう言うのと、彼女は安心したように胸を撫で下ろした。

そして俺が出て行こうとした時、

「気をつけてね」

俺は振り返らずに、低く喉を鳴らした。

彼女に約束した通り、五分程して世界樹の元へと帰った。

林檎もどきの樹が何処に生えているかはこの一帯を見つけた時に把握しておいた。なので、素早くそこまで走って十数個を尻尾に包んで運んできた。

「ありがとう。美味しいよ」

そのうちの二つを彼女に渡すと、お礼を言つてにつこりと微笑んだ。

俺も一つを口に放り込み、シヤリシヤリと食べる。

少しの間無言の時間が続いた。

俺が四個目の林檎もどきを食べようと口を開けた時、彼女は食べる手を止めてこちらを見た。

「なんで、助けてくれたの?」

その言葉には、少し恐怖が混じっていた。多分俺がこの問いで気分を悪くなるのかと思っているのかもしれない。

別にそんなことくらいで不機嫌になつたりしない。

「キュウ（気まぐれだ）」

「……………そう、なんだ。でも、どうして私を食べないの?」

オドオドしながら聞いてくる彼女を見ると、まるで小動物みたいだと思った。

それにしても、俺が人を食べない理由か。彼女にとって、その疑問は絶対に知りたいんだらうな。

でも、俺は人なんか喰うつもりはサラサラない。それは俺が元人間であることと、

「キュキュ（人なんて美味くねえだろ）」

「……………へ?」

「キュウ（こっちのほうが十倍美味しい）」

そう言つて、一つ林檎もどきを口の中に放り込む。

喰つたことはないが、人なんかよりこの林檎もどきの方が断然美味しいと思う。

その答えは意外だったようで、彼女は呆けた表情を浮かべた。

「キュツキュオ（別に人間なんて食べなくても生きていける）」

「……………なら、なんで貴方たちは人を食べるの?」

その貴方たち、というの誰を指しているのか。

それは俺たちーアラガミの事を指しているのか。

それとも先ほど彼女が口にした、ガストレアというものを指しているのか。

「……………キュキュウ（貴方たちって言うのは?）」

「……ガストレアに決まってるじゃない」

ガストレア。

彼女の言ってるそれは、アラガミの別称なのか。

それとも、アラガミとはまったく別のなにかなのか。

「キュオ（ガストレア、か）」

「そう、貴方たちガストレアはなんで人間を食べるの？」

彼女の眼差しには強い意志を感じる。ジツとこちらを見つめる彼女に、俺は根負けしたように顔を逸らす。

「キュオ（その前に一つを聞きたい）」

「……なに」

「キュオオ（ガストレアって、なんだ？）」

「……はあ？」

なに言ってるんだこいつ。

そう彼女の表情は物語っていた。

そんなこと言われても知らないもんは知らないんだ。

「キュウ（ガストレアってのはアラガミなのか？）」

「あらがみ？　なにそれ。ガストレアはガストレアだよ。そうとしか呼ばれてない

よ」

彼女の様子を見る限り嘘をついているようには見えない。

それが本当なら困った。アラガミを知らないなんて。

「キユオオ（俺はアラガミなんだが）」

「……どう見てもガストレアだよ」

「キユオ（まずガストレアってなんだ）」

「…人を食べる化け物だよ。眼が赤くて、大っきいの」

そう言われるとガストレアがアラガミの別称に思えるんだが。

アラガミは人も喰うし、眼が赤いのもいるし、そして大抵のものは大きい。

これだけみると、彼女が言った事と一致している。

「…それに、体液を送り込まれるとガストウイルスに感染する。そうやってガストレア

は増えたって聞いた」

「キユオオ（感染？　アラガミは感染なんかしないぞ）」

「……まずアラガミってなに？　私の言うガストレアとどう違うの？」

話を聞いた限り、俺はガストレアとアラガミは別物だと予想した。

アラガミはウイルスが元で生まれるものじゃなく細胞が集まって生まれる。だから、

噛まれたからって感染なんかしない。まあ、直接オラクル細胞を移植すれば別だが。

「キユキユ（アラガミはオラクル細胞の集合体だ）」

「おらくる細胞？ ガストレアウィルスじゃないの？」

「キユキユウ（ああ、その細胞が集まってアラガミが生まれる）」

「…細胞つてなに？」

「…キユキユ（…全ての生物を構成してるものだ）」

「…私にもそのオラクル細胞があるの？」

「キユキユオオ（いや、細胞にも種類があつてオラクル細胞はアラガミ以外持つてない）」

「他の細胞とは違うの？ そのオラクル細胞は」

「キユキユ（普通の動植物…：お前や他の動物、植物が持つてるのは全てが異なる）」

最後の林檎もどきを口に放り込む。

彼女には少し難しいかもな。

ウンウンと必死に考えている彼女を見ると、苦笑が漏れる。

「…：…つまり、アラガミとガストレアは違うつてこと？」

「キユキユ（結論だけ言うとな）」

もしかしたら、俺がこの前まで殺してきた奴らはアラガミじゃなく、ガストレアだったのかもしれない。

「…それに、貴方は眼が赤くないし」



「キュオオ（ガストレアってのは全部眼が赤いのか?）」

「そうだよ。ガストレアは絶対に眼が赤いの。……こんな風に」

そう言って彼女は瞳を閉じる。

そして再び開けた時、その瞳は赤く染まっていた。

「キュオオ（お前、ガストレアってやつなのか?）」

「……私たちは生まれた時から身体の中にガストレアウイルスがあるの。だから眼が赤くなる」

彼女は悲しそうにそう言うと、俺の身体をよじよじと登ってきた。

「……貴方はガストレアじゃないんだよね」

「キュウ（ああ、そうだ）」

俺の背に乗り、ギユツと抱きしめる彼女は寂しそうだった。

「……あつたかい」

「……………」

俺は黙ってそれを受け入れた。

彼女はなにも言わない。ただ、温もりを求めるようにキツく、キツくしがみついただけ。どちらも喋らない。ただゆつくりと時間が流れていく。

「私、さ」

不意に彼女が口を開いた。

その眼差しは穴から見える月を見ている。月光は俺たちを照らした。

「赤い眼をしているし、狐の耳だつて生えてるから、大人たちはみんな私を見ると痛いことばかりしてくるんだ」

「……キュウウ（……なんでそんなことしてくるだ？）」

「多分家族を、友達を、好きな人をガストレアに食べられちゃったから、そのウィルスを持つてる私を恨んでるんだよ」

「……キュキュ（お前はガストレアじゃないだろ）」

「……大人たちにはそう見えないんだつて。ガストレアと同じ赤い目をした私たちを、殺したくて殺したくてしようがないんだつて。そう、言われたの」

俺は、この世界はゴッドイーターの世界ではないことを確信した。

ゴッドイーターの世界に彼女のような境遇の子たちは居なかった。それにゴッドイーターたちは恨まれてなんかいなかった。寧ろ、人類を救う救世主として見られていた。

生まれた時から持っていた、と彼女は言った。それは望んで手に入れたものではなく、偶然と呼ばれるものだ。

それは、しょうがないものさだ。彼女はなにも悪くない。

「皆に言われた。『お前らが殺したんだ!』『化け物が!』『お前らは人間じゃない!』『家族を返せよ!』。……私はなにもやってないのに、そんなことしてないのにつ」

彼女の声は震えていた。嗚咽が漏れて、俺の背に涙が零れる。

彼女は一層強く、俺の背にしがみついた。

「……………もう、いやだよっ」

その手は痛いほど握りしめられていた。堪えきれない哀しみが、ボロボロと瞳からこぼれ落ちる。

「……………キュウウ（俺はそんなことしない）」

俺は様々な感情に支配されていた。

怒り、哀しみ、憎悪、色々な感情が吹き荒れるなか、怒りと哀しみが強かった。

彼女は今までの間、ずっとそんな目にあつてきたのだろう。それが哀しく、彼女をそんな目に合わせる大人たち——いや、この世界に俺は怒りを覚えていた。

彼女の他にも、同じ目に合っている子たちがたくさんいる筈だ。

何故、そんなことをするのか。少し考えればわかる筈なのに。

彼女たちはなにもしていない。

彼女たちは言うなれば被害者だ。

俺はそれが、元人間として悲しかった。

「……………キュオオ（俺は何処にも行かない）」

彼女を背から前脚を使い優しく剥がし、その哀しみが少しでも晴れるように包み込むように抱く。

この温もりが、少しでも彼女を癒せるように。

「……………ありが、とう」

彼女はそう言つて、静かに泣き続けた。



どのくらい経つたのか。

彼女は泣くのを止め、俺の首にしがみついた。

「……………私は、琴音朱莉。貴方は？」

「……………キュウ（名前なんて、ない）」

一瞬、前世の名前を名乗ろうとしてやめた。俺は生まれ変わったのだ。その名前は相応しくない。

「……………じゃあ、私が付けてあげる」

なににしようかなあ、とウンウンと唸る彼女はふと穴から覗く月を見つめた。

「……ルナ。貴方は、ルナ」

ゆつくりとこちらを向いた彼女はどうか？ と聞いてきた。

「キュオ（いい名前だ）」

彼女は嬉しそうに微笑み、俺の首を撫でた。

「……よろしくね、ルナ」

「……キュウ（ああ、朱莉）」

穴から入り込む月の光が、彼女たちを優しく照らしていた。

## Beast. 8 寂しさの中に

「……綺麗だね。こんな綺麗な星空、見たことないよ」

「キュウ（人の作った光がないからな）」

世界樹の天辺。そこに一人と一匹が身を寄せ合いながら、夜空を彩る星空を眺めていた。

たまに現れる流れ星に、必死に願いを三つ唱えようとする朱莉をルナは微笑ましそうに眺めていた。

流れ星が降る度に頭部に生えている三角耳が楽しそうにピクピクと動いている。

「キュオ（風邪引くから戻るぞ）」

「はい」

朱莉がしっかりと掴まったのを確認し、一気に根元の方へと駆け下りていく。その風を受けて、朱莉がひゃー！と楽しそうな悲鳴を漏らしている。

根元から四・五メートル付近に空いた穴へと入る。ルナが世界樹をくり抜いて作った仮ハウスはもう完全な住居へと変わっていた。

世界樹は縦も長い横にも長い。

その太さは周りを一周するのに、朱莉が十分近くかかったくらいだった。空けた穴にルナが入ってもまだまだ余りあるスペースができるほどに。

その中には食料を蓄えているスペースもあった。果物類は冷蔵庫も無いし、保存できる期間が長くないので置いてない。その代わりに燻製肉が結構な量蓄えられている。

ルナは燻製の作り方を知らなかったが、朱莉が知っていた。朱莉が言うにはよく作っていたらしい。

その所為あつて非常用の燻製肉がたくさん置いてある。

基本毎日の食事は二人で取りに行く。最初は危ないからとルナ一人で行っていたが、朱莉は激しく抵抗した。一人は嫌だ、と泣くのを見てルナは一人で取りに行くという考えは消えていた。

あれから、二人でたくさん話をした。この世界のこと、ガストレアのこと、呪われた子供たちのこと、今までの生活、そして、日本が五つのエリアに分かれてしまったこと。

色々なことを二人で話した。楽しかったこと、悲しかったこと、嬉しかったこと。

そうやって二人で話をし、寄り添うのがルナはすごく楽しく、嬉しかった。

心の奥底でルナは思っていたのかもしれない。寂しい、と。

この世界に生まれてからずっと一人で、アラガミであるから会話も出来ない。仕方ない、しょうがない、と割り切っけていても奥底では寂しかったのだ。

だから、ルナにとって朱莉の存在はどんなに大きくなっていった。

もう離れたくない、ずっと一緒に居たいと思うほどに。

その思いは、ガストレアのことを詳しく聞いてから増していった。

それもそうだろう。ルナはいい。アラガミであるからそう簡単には死なない。なにせアラガミはアラガミにししか傷付けることは出来ないのだから。

だが、朱莉は違う。ガストレアの牙が、鋭い爪が、朱莉に触れただけで消えてしまうくらいに、か弱い命だ。

「…あつたかい。おやすみ、ルナ」

「キュウ（おやすみ、朱莉）」

ルナは決めていた。この子を絶対に守り抜くと。この子に降り注ぐどんな理不尽も振り払い、守り抜いてやると。その力が、自分にはあるのだから。

自分の尻尾に抱きついて、幸せそうに寝ている朱莉を見て、ルナはそう誓った。





「キユオオ（戻ってみたい?）」

「うん。……だめ、かな?」

「キユウ……（別にダメじゃないが……）」

首にしがみつき、上目遣いで聞いてくる朱莉にルナは渋い表情を浮かべる。いや、別に表情とかあまり変わってはいないが。

お願い、と言ってくる朱莉にルナは深いため息を吐いた。

ある日、朱莉は突然東京エリアに戻ってみたいと言い出した。

朱莉の願いだ。叶えてやりたいが、あまり気は進まない。

それもそうだろう。朱莉が死ぬそうになった原因である“奪われた世代”が居る場所だ。行かせたくないと思うのは当然だ。

だが、嘗て一緒に過ごしていた子供たちにまた会いたいと言われたら断ることも出来ない。

別にずっと戻っていたいと言っている訳ではなく、生きていることを伝えたいらしい。

「それに、松崎さんにも会いたいから」

「キユオ（誰だそれは）」

「うーんとね。外周区で私たちがみたいな子の面倒をみてくれる人、かな。燻製の作り方も教わったんだ」

戻りたい気持ちは分かった。

もうあれから一ヶ月近く経っている。それに加え、朱莉が他の子供たちと別れたのは俺と出会う二週間程前だ。心配もしているだろう。

その松崎という人が奪われた世代か、と聞いてみたがそうらしい。

だけど、松崎という人は彼女たちはなにも悪くないと、ガストレアの憎悪を彼女たちに向けるのは間違っていると saying っていたようだ。

「キユウ（他の大人たちとは違うんだな）」

「うん。松崎さんはいいい人だよ。いろんな事を教えてもらったから」

「ここまで言われたら断るのも酷というものだ。」

「キュオ（分かったよ）」

「ほんとっ!？」

「キュキュウウ（だが、俺も着いていくからな）」

「うん。それは良いんだけど……どうやって着いてくるの?」

「キュツ（こうやってだ!）」

ルナは身を翻し、朱莉の足元にある影へと飛び込んだ。

その光景を見ていた朱莉は目を白黒させていた。

「え、えっ? な、なにがどうなったの……」

困惑している朱莉を見て、スイツと再び影から身を乗り出したルナ。

「キュツキュツ（こうやって朱莉の影に隠れるだ）」

「……す、凄いな。でも、これならバレないね」

あまりの出来事に理解が追いついていない朱莉だったが、当の課題であったルナを隠すというのはクリアできた。

「キュキュウ（なら、今日はもう遅いから明日にしよう）」

「そうだね。あゝ、明日が楽しみだなあゝ」

穴へと戻った朱莉は鼻唄を歌っている。そのメロディは聞いたことがある。だが、曲名が思い出せない。

ピョンツとジャンプしてルナに飛びつき、その首に顔を埋める。

「……ありがとね、ルナ。私のワガママを聞いてくれて」

「キュツ（あたりまえだろ）」

「……ふふっ。ありがとっ！」

朱莉がこうして笑ってくれるだけで、ルナは幸せに思えた。

あの時から、自分の中でどんどん大きくなつた朱莉の存在に、ルナは気づいていた。

最初は一人でも生きていける、なんて思っていたけど、やっぱり人恋しくなつてしま  
う。

一人では人は生きていけない。それを身を持つてルナは実感していた。

だがそれは、ルナだけでなく朱莉も同じだった。あの地獄から解放されて、初めて出会  
つた頼れる存在。

それは、朱莉にとって初めての存在だった。親に捨てられ、頼れるものは己自身。誰  
かに頼ろうとしても、誰もが自分自身を守るだけで手一杯だった。

そこに現れた頼れる大きな存在。それに依存するなど言われても無理な話だった。

だからこそ、朱莉の中で、ルナの存在はルナと同じくらいに大きくなつていた。

朱莉は、この温もりがずっと欲しかった。

朱莉とルナは、穴から一筋の光を見た。

——どうか、この幸せが長く続きますように。

穴から覗いた流れ星に、一人と一匹はそう願いを込めた。

## Beast. 9 故郷へ

「ねえ、警備員がいるみたいだけど、どうするの？」

「キュウウ……（どうするか……）」

相変わらず周りは鬱蒼と木々が生い茂っているが、前方に人工的な光が見えている。

こっそりと、朱莉が覗いてみるとそこにはバカデカイ縦に長い四角い建造物が聳え立っていた。あれが本当に人が造ったものだとは到底信じられない。

「キュオオ（あれがモノリスか）」

「大つきいでしょー」

ルナも少し離れた樹に登り、等間隔に並ぶモノリスを見ていた。

その背には何故か自慢気な朱莉が乗っている。最早そこは朱莉の特等席と化していた。

「キュウウ（見張りが多過ぎる）」

「これじゃあ入れないよ……」

想像を超えた警備の厳重さに、自慢気だった表情は暗くなり、朱莉はすっかり参ってしまっている。

昨日の晩に約束した通りに、朱莉たちは東京エリア付近に来ていた。

まあなんとかなるだろう、と高を括っていたルナだったが思いの外侵入が難しい事を知ってしまった。

巡回兵の数はそこまで多くはないが、監視カメラの量が異常だった。其処彼処に設置され、死角を無くすように配置されていた。

「うう……」

「キュオ（大丈夫か？）」

「うん……。ちよつと気分が悪いだけだから……」

ガストレアはごく一部を除いてバラニウムという金属に発せられる磁場に弱い。天敵、弱点と言っている。ガストレアウィルスの保菌者である朱莉もその影響を少しだが受けてしまう。できれば、今すぐにでも影響外へと抜きたい。

「……………キュウウ（……………ちよつと待ってる）」

「う、うん」

少し経つとルナはゆっくりと朱莉を樹の枝へと降ろした。それを朱莉は不安そうに見つめる。

「キュオオ（心配するな、すぐ戻る）」

「……………わかった」

渋々とだが頷いた朱莉にルナは小さく喉を鳴らして頷く。

そして一気に樹の枝から躍り出ると、森の中へと消えていく。

「……………」

やはり、ルナが居なくて不安なのか、朱莉はルナの消えていった方向からずっと、視線を外すことはなかった。

「キュオ（戻ったぞ）」

「っ！ お、おかえり！」

朱莉の体感的には十分くらいだろうか。

朱莉が不安を抱え、消えていった方向に視線を向けてからルナはすぐに戻ってきた。朱莉はその一秒一秒がとても長く感じた。

少し目尻に涙を浮かべた朱莉にルナは少し驚きつつも、朱莉の愛の籠っているであろうタツクルを受け止めた。

「なにしてきたの？」



「キユオオ（侵入の為の鍵をとってきた）」

「鍵？」

「キユオオ（ああ、これが一番手っ取り早い）」

ルナの金色の双眸が樹の根元へと向けられる。つられて朱莉がその視線の先へと向ける。かなり高い所で陣取っているため、枝や葉が邪魔をして中々それを視界に捉える事が出来なかった。

しかし、地面だと思っていたそれがもぞもぞと動いたのを見て、初めてそれがなにかを把握した。朱莉の地面へと向ける瞳は、驚愕に染まった。

——それに視線をやり、ルナは心の中でニヤリと黒く嗤った。



この薄暗い中の見回りほど嫌なものはない。

バラニウム弾を詰めた小銃を腰に吊ったまま、ザクザクとジャングルブーツの底で砂利を踏みしめながら歩く。陸上自衛官・栗城彰伊くりきしょうい三曹は仕事だと割り切りながら、パトロールに出ている。

夜間のパトロールは週に一回必ず回ってくる嫌な仕事だ。なにせ、モノリスの磁場に護られていると言われても、絶対ではないのだ。それを辺りが見えづらい夜中となると緊張が収まることはない。森の奥にライトの明かりを不意に向けた時に写った樹のシルエットに恐怖して悲鳴を上げかけることなど日常茶飯事だった。

東京エリア外周区・第三十二区。

彰伊がパトロールしているのは、その生と死の境界線。

左手にライトの明かりを向けると、漆黒の壁が立ち塞がっている。その漆黒の建造物こそ、人類の切り札モノリス。

これを初めて近くで見た時は、人工建造物だとは到底信じられなかった。天を貫くように聳え立つそれは、人類最後の砦だった。

縦に一・六一キロメートル、横に一キロメートルもある長方形の超巨大なバラニウム建造物。その黒光りする金属塊は、全ての光を飲み込むようだった。

ピタッと触れてみるとスベスベとヒンヤリしている。この建造物に自分のバラニウム弾を何発集めれば出来るのか。何億発だろうか。

まさに、人類の神秘とも言える。

歩き詰めてようやくモノリスの端まで着くと、視界の広がる闇の世界を睨みつける。あの森の中に、自分の妹と母だったモノがいるのだろうか。この森の中で、終わりのない地獄を過ごしているのか、もうそんなことも思考できる意識も無くなってしまっているのか。

少し感傷に浸っていると、不意に呻き声が聞こえた気がして、慌ててその方角にライトの明かりを向ける。

ライトの明かりに照らされた森を見つめても、ガストレアの影は見えない。

心臓がぼくぼくと鳴り、過呼吸に陥ったように喘ぐ。あの時の恐怖が思い起こされそうになり、彰伊は首を振った。なにを怯えているんだ。ここはモノリスの間近だぞ。

十年前とは違うんだ。人類は勝利したんだ。そう自分に暗示をかける。

やっと落ち着いた時、何処からか風切り音が聞こえた。疑問に思う間も無く、ドスンツと何かが付近に落下し、急いでライトを向ける。

ライトの先にはモノリスとは違う、ぬらぬらと黒光りする体表。鋭い牙の生えた口からは鳥肌がたつような金切り音が聞こえる。

「が、ガストレア……い！」

そんなのあり得ない。ここはモノリスだぞ。

いや、ダメだ。パニックになるな、落ち着け。心の中で何度も唱え、ゆつくりと腰から小銃を抜き、慎重にピントを合わせる。ガストレアはもぞもぞと動くだけでこちらに何かを仕掛けてくる気配はない。

そして、周囲から同じようにドスンドスンツと聞こえた同時に、トリガーを絞る。肩に鋭い振動が伝わり、派手な銃口炎を上げてガストレアの目の一つを撃ち抜く。

ギイツと気色の悪い悲鳴を上げてもぞもぞ動くそれに向かって何度もトリガーを絞る。

カチカチという音が聞こえ、弾倉が空になったことに気づく。視線の先のガストレアは既に死に絶えていた。

やった、勝ったぞッ！

そう思った時、辺りからも銃声が聞こえてきた。

それを聞いて、急いで弾倉を補充して襲われている仲間の応援へと向かった。

向かった先では既に戦闘は終わっており、此方もまた仲間が勝利をあげていた。現場に立っていた先輩のところへと急いで向かう。

「先輩ッ。大丈夫でしたか？」

「……彰伊か。こっちは大丈夫だ。お前は？」

「大丈夫です。他の皆は？」

「いや、他も無事だ。怪我人はいない」

ホツと胸を撫で下ろす。

良かった、仲間は無事だったか。しかし、喜色を浮かべている自分とは違い、先輩である小名正隆軍曹の顔色は晴れない。

「どうしたんですか？　そんなにしかめっ面で」

「……いや、な。ちよっとおかしなところがな……」

「おかしなところ？」

ああ。と言いながら倒したガストレアへと視線を向けた正隆に、つられて彰伊も向ける。

「気づかないのか？　こいつらの身体をよく見てみる」

「えっ？　身体………ッ！」

「気づいたか」

彰伊も正隆の言っていたおかしな点に初めて気づいた。先ほどまでは勝利の美酒に酔いしれていたが、その酔いも一瞬で覚めるほどの衝撃だった。

「脚が、無い……………ッ！」

そう、脚がないのだ。まるで腕がれたように雑に挟り取られている。

急いで自分の倒したガストレアに向かう。

予想通りに此方もなかった。同じように腕がれている。

焦る気持ちを抑えながら、正隆の元まで戻る。

「……………俺の倒した奴も、無かったです」

「……………カメラも、」

「？」

「……………監視カメラも、一部破壊されていた」

「か、カメラ……………？　　ーッ！　　ま、まさか……………!?!」

嫌な汗が背中を走る。

だが、正隆はああそうだと肯定の意を表した。

「……………これは、人為的なものである可能性がある……………！　　急いで聖居に連絡するッ」

声を荒らげながら、基地へと走っていく正隆の背を、彰伊は嫌な予感が当たらないこ

とを手を合わせて祈った。



空を見上げると、太陽が静かに地球を照らしている。その光を高層ビルやマンションが遮っている。

その一帯を抜けると、そこは先ほどまで居た賑やかな街並みはそこには無く、ゴーストタウンのようだった。廃墟となった建造物が其処ら中に放置されている。

朱莉はそれに懐かしさを感じた。

「外周区……、戻ってきたんだ……」

眩きは風に乗り、消えていく。

帽子に隠れた三角耳がピクピクと動き、帽子をずらす。

少し前まで居た自分の故郷とも言える場所に帰ってきた朱莉は空を仰ぎ、少し感傷に浸る。

あの過ちから色々な事があった。その地獄の日々では後悔しかなかった。悔やんでも悔やみきれない思いで身を割かれそうだった。いつ殺されるのか。恐怖の日々だった。

だが、今はその選択に後悔は全くなかった。確かにあの日々は地獄だった。辛かったし、何度も泣いた。

でも、今はあの時の後悔や痛みを塗りつぶしほど幸せだった。

今は姿の見えないルナへ、朱莉は改めて感謝した。

「でも、あれ大丈夫だったかな……」

不安そうに自身の影に向かって問いかけると、その影はユラユラと揺れた。朱莉は大丈夫だ、と言ってるように見えた。

あの時、樹の根元に居たのはガストレアだった。

行ったことは至極簡単。

捕獲してきた息絶え絶えのガストレアを警邏網の中に放つただけ。十体ものガストレアが一気に降ってきたため、警備兵たちは阿鼻叫喚の渦だった。だが、ちゃんと捕獲



してきたガストレアは全て脚を腕いでおいたから犠牲は出なかった筈だ。

それを囿にこっそり侵入したという訳だ。当然監視カメラの一部は破壊しておいたが。

「でも、なんで誰も居ないんだろう……」

朱莉が辺りを見回しても、人の気配というものがない。いつもはこうやって外周区に誰か入ってくる、誰かしらはひっそりと此方を監視する筈なのに。

「……ん？」

辺りを探して歩いていると、少し蓋のずれたマンホールを見つけた。

「もしかして……」

隙間に指を入り込ませ、力を少しだけ解放して思い切り開ける。

そして、開けたマンホールに素早く入り込み、中に入り蓋を閉める。しかし、完全には閉めずに少しだけずらしておく。でないと、外から開ける時に苦勞するからだ。

マンホールの中は薄暗く、ぴちゃぴちゃと水音が響いている。

朱莉がマンホールに入ったのは、自分の時も使用した経験があったからだ。内部で子供たちの排斥運動などが起こったときなどはここに避難をしていた。外周区にいると殺される危険があるからだ。

しばらく、五感を頼りに進んで行くと、誰かの話し声が聞こえてきた。

内容までは聞き取れないが、少女と男性のような声。  
もしかしてー。

そう思い、声の聞こえた方向へと走り出す。

人影はすぐに見えた。

「松崎さん！」

松崎と呼ばれた男性は、此方の声に驚いたように振り返った。

「その声は……朱莉ちゃんか！」

此方の姿を確認すると、松崎は朱莉にすぐさま駆け寄った。

「良かった……」。内部の大人に連れて行かれたと聞いた時はどうしようかと無様に慌てていたが、本当に無事で良かった……」

「松崎さん……」

ギョツと此方を抱きしめる松崎に朱莉はルナと似た優しさを感じた。

少しの間、松崎は朱莉を抱きしめるとハツとなにかに気づいたように離れた。

「朱莉ちゃん、大丈夫だよ。元々ここに居た子だ」

「……わかった」

朱子と呼ばれた少女はおずおずと近づいてきた。黒髪のセミロング、身体を見ても自分のように稀なことはないみたいだった。

「えっと、始めまして朱里ちゃん。琴音朱莉っていいです。よろしくね」  
「……………赤石朱里、です」

差し出された手をジツと見つめていた朱子だったが、恐る恐るその手を握った。握ってくれた手を見て、朱莉は嬉しくてギョツと強く握った。

「でも、どうやって此処に戻って来れたんだい？」

「それは……………」

「ん？」

事情を話そうとしたところで、松崎の服の裾をくいくいと朱子が引つ張った。

「……………そうだね、もうちよつと落ち着いたところで聞こうか。朱莉ちゃん、着いてきて」

「あ、はいっ」

朱子を先頭に歩き出した松崎の後を、朱莉は置いていかれないように慌ててその背を追った。

## Beast. 10 旅立ち

カツンカツンと松崎の持つ撞木杖が地を叩く音が響き渡り、反響を繰り返す。前を歩く松崎は時々こちらを振り返し、朱子に言葉をかけて歩調を合わせてくれている。

「……寒いと思っていたけど、あんまり寒くないんですね」

「発電所から出る排水は大抵熱水だからね。冬なら外より暮らしやすいんだよ」

時折吹く風に、松崎の白髪が静かに揺れる。

前を歩く朱子はマンホールチルドレンなのだろう。朱莉もその存在は知ってはいたが、実際に入るのは初めてだ。

「朱莉ちゃんはこのころに来たのは初めてだよ」

「はい。ずっと外で暮らしていました」

朱莉の住んでいた外周区にもそういう子供たちはいた。だが、全員というわけではない。下水道に一地区全員が入り切るわけがないのだから。

だから、まだ感情の制御が出来なく眼が赤くなってしまうている子供たちを下水道に住まわせていた。

朱莉は感情の制御はできていたので外で暮らしていたのだ。そうやって感情の制御

ができた子供から下水道から出て行き、新しくきた制御のできていない子供たちを下水道に住まわせるのが朱莉たちの区の常識だった。

前を歩く朱子を見てみると、眼が常に赤く光っている。あの子もまだ制御が出来ていないのでここで暮らしているのだろう。

「……さあ、着いたよ」

しばらく歩いていると、松崎が一つのドアの前に立った。

そのドアを開けて中に入ると開けた空間が広がっていた。談笑する子供たちなどがあることから、ここが彼女たちの溜まり場なのだろう。朱子はその輪の中に入っていくのが見える。

朱莉が物珍しいようにキョロキョロと見ていると松崎は奥から折りたたみの椅子を出してくれていた。

「朱莉ちゃんはこのを見るのが初めてかい？」

「はい……。他の子が下水道で他の子たちの面倒をみていたので」

松崎は少しの間、この空間を照らしているランタンの灯を見ていた。

「……改めて言うけど、本当に無事で良かったよ」

「……はい」

ランタンから目を離れた松崎は朱莉を見た。そして、中指で眼鏡のツルをくいっと持

ち上げる。

「それで、今まで何があつたんだい？」

「それは――、」

その問いに、朱莉は連れられてからのことを話した。車で拉致され、訳も分からないうちに未踏査領域へと連れて行かれたこと。そして、大切な人に助けてもらったこと。ルナのこととはあまり詳しくは説明しなかつたが。

その話を瞳を閉じ、辛そうに聞いていた。

朱莉が話が終わると、松崎はゆっくりと目を開けた。

「……………辛かつたんだね。なにもできなかつた私をどうか恨んでくれ…」

「い、いえつ。松崎はなにも悪くないですよ」

深く頭を下げる松崎を慌てて止める。しかし、顔を上げた松崎の表情は優れない。

「本当に大丈夫ですよ。それに、そのおかげで大切な人に出会いましたから」

幸せそうに呟く朱莉に、松崎は不安そうに見つめる。

「……………朱莉ちゃんはイニシエーターになったのかい？」

「えつと、違いますけど…………。どうしてそう思ったのですか？」

それを聞いた松崎は安堵の息を漏らした。目頭を揉むと、ゆっくりとこちらを見た。

「いえ、あの状態から戻ってこれたということは、民警に助けてもらったのかと思つたの

でね」

いや安心したよ、と呟く松崎に朱莉は少し驚いた表情を浮かべる。

「よくある話さ。民警には荒くれ者が多いから、無理矢理子供たちをイニシエーターにさせる。そんな子供たちの末路は酷いものさ」

そう言つて、奥の方で談笑をしている子供たちを悲しげに見つめる。

子供たちはキヤイキヤイと楽しそうにしている。それを見ると、松崎は優しげに微笑み朱莉を見た。

「……それで、朱莉ちゃんの大切な人は今は居ないのかな？ お礼を言いたかったんだが」

「そ、それは……」

朱莉は言いよどんでしまった。話すべきなのか、それとも黙っているべきなのか。

ルナにそのことについてはなにも言われてない。つまり、朱莉の判断に任せる、ということだろう。

それを見ていた松崎は、小さく微笑みいいですよ、と朱莉に言った。

「…その様子を見ると、なにか事情があるようだね。無理になんて聞かないよ」

呆けたままの朱莉に向かって、松崎はにつこりと笑った。

「でも、一つだけ聞かせておくれ。その人は、悪い人じゃない。そう言い切れるかい？」

「はい。絶対に悪い人なんかじゃないです」

ルナのことを悪い人、と言われて少し食い気味に答えてしまい、少し気恥ずかしくなり、俯いてしまった朱莉を松崎は、はははっと笑った。

「朱莉ちゃんがそこまで言うならそうなんだろうね。君は人を見る目があると思ってるからね」

そう言い、松崎はイスから立ち上がり朱莉の頭を優しく撫でた。

そして、奥の棚の上から黄色いバックパックを取り出ししてきた。

「これを持って行きなさい。少しだが、お金も入っているし、衣類や生活必需品もあらかじめ入っている」

「え、えっ?」

いきなり手渡されたバックパックに目を丸くして、状況が理解できていない朱莉に松崎は、撞木杖の頭をギュツと両の手で握る。

「ー君は、旅立つのだろうか?」

ドキンツと心臓が鼓動を打った。顔に出ていたのか、松崎は優しい笑みを浮かべた。

「今日、帰ってきた君の顔を見て、そう確信したよ。いや、君は帰ってきたのではなく、別れをしに来た」



違うかい？ と問いかけてくる松崎に朱莉は驚いた表示のままコクコクと頷いた。

「この短い間で、君になにがあつたかは私には分からない。だが、それが君にとつて人生の転機と言えるほどのことだということとは、君を見ていてわかつたよ。ここにいた時の君とは、まるで違つていたからね」

松崎は朱莉から視線を外し、子供たちを見た。

「君は、今のあの子たちには無い、大切なモノを見つけたんだろうね。だって、今の君は――」

そこで松崎は話すのをやめ、朱莉の肩に手をやった。

「これから君には様々な苦難が待ち受けているでしょう。泣きたいことや、憎しみがつのることもあるかもしれませんが、それでも、君は出ていきますか？」

肩に手をやったまま、しゃがんで目線を合わせてきた松崎の瞳は真剣だった。

朱莉は顔を引き締め、神妙に頷く。

「――それでも、私は行きます」

暫く、松崎は朱莉を見つめていると、不意になつこりと微笑んだ。

「ならば、行きなさい。それが貴女の後悔のない選択ならば、私はそれを見送ります」

「――はいっ！」

朱莉はイスから立ち上がり、ぺこりと松崎にお辞儀をした。

そして、バックパックを背中に背負い、外に向けて歩き出した。だが、ふと不安を朱莉は感じてしまい、歩みを止めてしまった。

すると後ろから、朱莉ちゃんと松崎の呼ぶ声がした。振り向くと、松崎はいつもと変わらぬ優しい笑みを浮かべて言った。

「寂しくなったり、不安になっただけでも相談しに来てください。私はいつでも、貴女を待っていますから。だから――」

――安心して、お行きなさい。

それを聞き、朱莉は目の端に涙を浮かべて、はい！ と答えた。

――走り出した彼女に、もう不安や迷いはなかった。

## Beast. 11 赤い瞳

「うーん……。これと、これと、あとこれも必要だよね」

棚に並べられているキャンプ用品を手に取り、ウンウンと唸る帽子被った朱莉をバイト歴三年の水間俊之がほっこりとした様子で見つめていた。

ホームセンターの隅っこの方に位置するこのキャンプ用品区画。ここが俊之の担当エリアだった。

今日もほとんど来ない客を前に、欠伸をしながら商品を並べていた。

そろそろ在庫整理のフリしてサボるか、と腰に手を当て凝り固まった腰を鳴らす。

こんな世の中でキャンプ用品なんて買いに来る酔狂な輩はいないと毎度毎度思っているが、仕事が楽なので言わないことにしている。

スタッフ以外立ち入り禁止と書かれた扉に向かい、歩を進める。

そこでふと視界に入った。また小学生三、四年くらいだろうか。まだ小さい子供が一つのキャンプ用品に頑張つて手を伸ばしていた。

これを見て見ぬ振りが出来るほど、俊之は非情にはなれなかった。

少し駆け足でその少女の元に向かうと、手を伸ばしていたキャンブセットを手に取る。

「これでよかったかな？」

「あつ、はい。ありがとうございます」

少女は少し驚いたような表情を浮かべたが、すぐさまぺこりと頭を下げてきた。

「いやいや、お礼は要らないよ。一応店員だからね」

そう言うのと、少女はクスリと笑った。

「じゃあ、それのお会計お願いします」

「ん、了解」

先にレジに向かって歩き出すと、後ろをちよちよこと少女がくつついて歩いてくる。

その姿が愛らしくて、思わず顔がにやけるが前を向くことで隠す。

以前、友人の一人が結婚して子供が欲しいと言っていたのを思い出した。俊之はあまり子供は好きではなかったが、この姿を見ると少し子供が好きになっていた。

いつか、自分も恋をして、結婚して、子供を作ったりするのかなあ。

そんな自分らしくない想いに思わず苦笑が漏れる。

ーだけど、悪くない未来なんだろうな。

俊之は柄にもなくそう想った。



「ふうー、これで全部かな」

両手いっぱい荷物を抱え、疲れた表情を浮かべた朱莉は大きく息をついた。その表情とは裏腹に、声は満足気に弾んでいた。

「お金は……七割は使ったかな」

懐から取り出した財布には、松崎から貰ったお金が入っていた。

けっして少くない額のお金を無駄遣いしないように気をつけながら、必要なものだけを買ったが、かなり減ってしまった。

あの時一緒に貰った黄色のバックパックは、裏路地に隠してある。流石にあの大きなバックパックを背負って店に入ったら怪しまれると思ったからだ。

人目を気にしながらこっそりと裏路地に入り、バックパックを回収する。先ほどかつ

たキャンプセットを手早く詰めていく。

ナイフやマツチ箱、毛布や小型のテントなど色々なものが入っている。

それらを詰めていくと、余ったスペースはなかった。少し余るかと思つたが、計算違  
いだったようだ。

身の丈ほどあるバックパックを背負い、こつそりと裏路地を駆けていく。

このまま裏路地を抜けて外周区に出る。そして、外周区を経由して外に出る。計画と  
も言えない陳腐なものだが、今の状況ではそれで事足りた。

それもそうだろう。外から東京エリアに入つてこようする者はいようとも、出ようと  
する奴なんかほとんどいない。

「……えっ。い、今のつて……」

なんの問題も起きない筈だった。……さつきまでは。

パンツ！ という乾いた銃声を聞くまでは。

ここはもうすでに外周区だ。先ほど足を踏み入れたから分かる。そして、朱莉は知っ

ていた。この外周区で鳴る、乾いた音の意味を。

何度も見て、聞いたこの音の正体を。どくどくと嫌に心臓の音が聞こえる。思考するまえに、朱莉は既に走り出していた。

呪われた子供たちの力を解放して、全力で走っていた。

段々と大きく見えてくるモノリスに嫌な汗が顔を蔭る。壊れるままに放置されている建造物が嫌に目に入る。

そして、見つけた。

立ち止まった先に見える、ねじ曲がり、半ばから折れた電波塔の脇にポツンと止まっている、場違いなモノに。

白と黒のモノクロのボディ。その上には赤い筒が乗っている。

自分のような、子供たちにとっては悪魔とも呼べるものを。

再び聞こえた、パンツッ！という乾いた銃声が、東京エリアの暗部に虚しく響きわたった。

## Beast. 12 過ち

一台の原付が、制限速度を超える速度で公道を突つ走っていた。乗っている少年の顔色は優れない。

通りすがりの中学生だろう少年から借りた原付を必死に飛ばしながら、焦る表情を浮かべる彼——里見蓮太郎の心の内は、深い後悔の念で埋まっていた。

あの時、あの瞬間、自分はあの少女を助けられた筈だった。あの警官どもは、周りに事情すら聞かずに少女を拘束した。

大抵の警官は、“呪われた子供た”をきちんと裁こうとはしない。普段は子供たちを人間扱いたくない癖に、ああいった行為をした時だけ、彼等は都合良く子供たちを人間扱いするのだ。

それ以前に、彼等の乗ったパトカーが進む先にはめぼしい警察署どころか派出所すらない。

だからこそ、その光景を見て、蓮太郎は分かっていた筈だ。この後、少女の身になにが起こるかを。



それなのに、自己の保身に走り、見捨ててしまった。

——里見蓮太郎。お前がなりたかつた民警は、こんなものだったのかッ？

無辜の市民を守り、正義を遂げる偉大な仕事が、民警というモノではなかつたのか。

お前は見た筈だ。あの時の少女の想いを。少女の伸ばした手を。その手を取り、助け出してやるのが、お前の目指したのモノであつた筈だ。

ぐるぐると様々な想いが、脳裏を駆け巡る。

そしてなにより、自分に対しての震えるほどの怒りがこみ上げてくる。ハンドルを握りしめる手に力が入る。

だが、俺が今やるべきことは、いち早くあのパトカーに追いつくことだけだ。

グリップを捻り、さらにスピードを上げる。先ほどの怒りに当てられてか、無意識の内に義眼も解放していた。車の合間を縫うように見事に抜けていく。

そのままスピードを落とさず、猛スピードで駆けていく。

そして、倒壊したビルや、廃屋などチラホラと見え始め、外周区に入ったと理解でき

た。

その時だった。

蓮太郎の耳にパァンツ！ という乾いた音が聞こえて来たのは。

「クソツッ!!」

吐き捨てるように零れた怒りの声が、悲しいほど静かな東京エリアの闇に響く。

蓮太郎は銃声の聞こえた方向へと思い切りアクセルを捻る。

——お願いだ、間に合ってくれッ。

それだけを思い、周囲を視線を巡らせる。蓮太郎はまだ倒壊の危険のない建物を粗方見て回る。

そして、モノクロの車は何軒か回ってすぐに見つかった。

「ツッ」

蓮太郎は原付を停める間も惜しんでそのまま跳躍した。原付がコントロールを失い、横滑りになりながら前方にあつた金網に激突し失速。

少年には悪いが、心のうちで謝るだけに留める。

捻れた電波塔の横に停車してあるパトカーに駆け寄ると、案の定もぬけの殻だった。蓮太郎の鼓動がドクンといっそう早くなり出す。

焦る心を抑えられずに壊れた電波塔へと走る。錆び付いた鉄柵に向かって一気に跳躍。天辺を掴み、全力で引き寄せ乗り越えたところで、小さいが確かに声が聞こえてきた。

そちらに目を向けると、痩せ眼鏡と角刈りの警官が血濡れたコンクリートに倒れている少女へと、拳銃を向けていた。

——その時、蓮太郎は自分の中で何かが切れた音を聞いた。

「やめろおおおおおおおおおおツツツ!!」

着地するや否や、脚部に仕込まれたカートリッジ底部をストライカー撃発。擬似伏在神経に沿って配置されたエキストラクターが空薬莖を排出。イジェクト

爆発音と共に、吹き飛ばされるような加速感を感じながら前方へと疾<sup>は</sup>る。

驚いた二人の警官が、こちらに拳銃を向けるよりも早く、制圧する。勢いを多少殺しながら、痩せ眼鏡の警官腹部へと掌打を放つ。白目を剥き昏倒。

そして、流れるように呆然と立つ角刈りの警官の顔を裏拳で強打。鼻血を出しながら後ろ向きに倒れていくのを見届けながら、『百載無窮の構え』を取り残心。

ドサツと裏拳を喰らった角刈りの警官が倒れる。

制圧を確認。建物の隙間から流れる風に髪が攫われるのを感じながら調息。

ハツとすぐに我に返ると、血濡れたコンクリートに横たわる少女を見ると足が重く、後悔に染まっっていく。

だが、近づいていくと少女の胸部がゆっくりとだが動いていることに気がつく。

ありがとう……。誰に向かって言ったかもわからない言葉が不思議と零れた。急いで少女を病院に連れて行かなくては、折角起こった奇跡に意味がなくなる。

だが――、

「ツッ」

そして、少女との距離があと数歩となった時、蓮太郎の第六感が盛大に警報鳴らし、瞬間距離をとる。

蓮太郎がコンマ数秒前に居た場所に数本の黒い何か（何か）がコンクリートに、ズカカツと突き刺さり粉塵が舞う。

「な、なんだ……?」

コンクリートへと突き刺さった黒い物体を見て、蓮太郎の表情が驚愕に染まる。それ

がバラニウムの漆黒の色に酷似していたからだ。

驚愕が解ける前に、その黒い物体は溶けるように消えていく。

そして、コンクリートへと突き刺さったときに舞った粉塵が晴れると、そこには血濡れの少女を抱えた狐の耳を生やした少女がいた。

その少女は、こちらを警官の仲間と勘違いしているのか、瞳に怒りの光がある。

それに気づいた蓮太郎は誤解を解こうと一步を踏み出す。

「待ってくれ。俺は敵じゃー」

「……ルナッー」

「ッー」

少女が誰かの名前を叫ぶと足元からーいや、正確には少女の影からあの黒い物体が飛び出してきたのを見て、全力で横に飛び回避。

「影から……？ そんな馬鹿な……」

蓮太郎が思考に浸る間も無く、再び黒い物体が蓮太郎目掛けて伸びてくる。それを義眼を解放し、紙一重で躲す。義眼が演算を開始し、未来予測の位置を暴く。

頭部を狙ったそれを、身体を捻り義肢である右腕で受け流す。ギインツと金属音を立てながら、それはコンクリートへと突き刺さり、粉塵をあげる。

その隙を見逃さず、後ろへと大きく跳躍し距離をとる。

狐耳の少女は血濡れの少女を背負ったまま、こちらを見ているだけで何もしてこない。いや、目には焦燥が浮かんでいる。

「……君は、その子の知り合いなのか？」

「……」

頷きもせずにこちらを睨みつける少女を見れば、それは一目瞭然だった。

蓮太郎は両手を上にあげ、敵意がないことを示す。

「……今、その子はとても危険な状態だ。俺にはその子を助ける手段がある。だからその子を渡してくれ」

「……その必要はない」

「……どういう意味だ？」

「私ならすぐに助けられる」

「それは、どういう意味だ？」

「……貴方が知る必要は、無い」

蓮太郎は無言で威圧するが、少女は目を一瞬たりとも離さなかつた。蓮太郎は小さく舌打ちをした。

「……絶対助けるよ」

少女は無言でこちらを一瞥した後、抜け落ちた天井の穴へと跳躍すると、崩れた壁か

ら外へと消えて行つた。

蓮太郎はそれを見届けると、苛立ちを隠せずコンクリートの側面を殴りつける。手から血が滲むが、そんな些細な事には蓮太郎は気づいていない。苛立ちの矛先はあの少女にはなく、当然の如く自分自身に対してだった。

しかし、あの少女は一体……、

思考の海に浸る寸前、チラリと視界に入つた警官たちを見て、小さい舌打ちが零れる。「……まずはここから逃げないとな」

考えるのはそれからだと言い聞かせ、蓮太郎は早足にその場所を去つて行つた。